【40】

氏　名（国籍）	**ゴーシュ　ダスティダー，デバシリタ（インド）**
学位の種類	博　　士（文　　学）
学位記番号	博　甲　第　4180　号
学位授与年月日	平成 18 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**安部公房文学における実存の越境性をめぐって** －作品における普遍的魅力の再評価－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	浜　名　恵　美
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	新　保　邦　寛
副　査	筑波大学教授		名　波　弘　彰
副　査	筑波大学助教授		青　柳　悦　子
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	吉　原　ゆかり

論　文　の　内　容　の　要　旨

本論文の目的は，安部公房の三つのジャンル（短編，長編，戯曲）の作品に描かれた実存のあり方を分析することにより，公房文学の多面性，つまり表層と深層に仕掛けられた日本の戦後の社会現象，現代人の存在状況，複雑な都市環境とその中における人間関係に対して，インド出身の著者が，二十一世紀における新たな解釈と公房の時代を超えた先進性の再評価を行うことである。

本論文は以下のように三部構成になっている。

序章
第一部　短編小説における人間存在のモノ化
　第一章　ロボットと人間疎外 ― 短編小説「R62 号の発明」をめぐって ―
　第二章　死者の語りという戦略 ― 短編小説『変形の記録』をめぐって ―
第二部　長編小説『砂の女』における共同体の拒否と受容
　第三章　『砂の女』のプロローグ ― 仁木順平の「自己」―
　第四章　「砂」の集落の〈場〉としての寓喩性
　第五章　安部公房の『砂の女』の〈砂の集落〉の構想
　　― キプリングの《蟻地獄の恐怖》のプロットとの比較を通して ―
　第六章　極限状況に置かれた人間の「解放」
　　― 公房とキプリングにみられる他者関係の再構築を通して ―
第三部　現代都市の深層を描く公房演劇
　第七章　『友達』がほのめかす国際政治の裏側
　第八章　「棒の森」の超時代性をめぐって ―『棒になった男』論
　結章

第一部では，一九五〇年代における短編小説を取り扱っている。第一章では「R62 号の発明」を，第二章では『変形の記録』を精緻に分析し，現代社会における人間性の抹殺あるいはモノ化に改めて注目している。

第二部では，一九六二年六月に“純文学書き下ろし特別作品”として発表された長編小説『砂の女』を多角的に分析している。すなわち，第三章では「自由」と実存との関係を，そして第四章では公房文学の特徴をなす寓話・寓意性を検討している。さらに第五章と第六章では，『砂の女』を比較文学的観点からとらえるために，インドを題材とするラドヤード・キプリングの短編「モロウビィ・ジュークスの不思議な旅」と比較考察している。この章では，単に英文学との関連性あるいは相互関係に注目するだけでなく，ポストコロニアル批評理論などを援用してそれぞれの文化的・歴史的環境の差異と同一性をあらたに理解しようとしている。

第三部では，第七章で一九六七年に発表された公房の刺激的な演劇『友達』に表象された個と共同体との悲劇的な関係を，国際政治における日本とアメリカの権力関係に関連させて，分析しなおしている。第八章では，一九六九年の『棒になった男』を棒の存在を通して分析し，人間存在の皮肉な事実に迫ろうとする。現実と非現実の間の宙づり状況－人間存在のパラドックス－は，アンチ・クライマックスとなっている。安部公房は，世間によってモノ化された人間存在，その世間からの解放を求めて葛藤する必死な個の姿と，その結末が，共同体による個の抹殺または他者の道具，すなわち「棒」のごとき生を生きる情けない人間存在の事実を見事に表象してみせたとしている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文が研究対象としている安部公房文学は，今日世界に拡散している驚異的な村上春樹現象の先駆として，戦後，人間存在の根源的不安を斬新な手法で表象し，そのテーマの普遍性により，多くの外国語に翻訳され，海外でも高く評価されてきた。本論文は，あらためて公房文学の普遍的魅力に注目し，その小説と演劇作品を新しい観点と方法で問い直し，公房文学を世界文学の中に再度位置づけ直した充実した研究である。

本論文の著者は，公房文学における実存概念とは，第二次世界大戦後のフランスにおける実存思想と時代的に平行しているものの，公房の戦中と戦後の体験に根ざした特殊性をはらんだ，現実存在に関する唯一の自覚と表現であるという立場に立っている。公房の実存観からすれば，人間は共同体に拘束され自由がないと措定されると同時に，その絶望状態からの脱出が自由として希求される。公房の作品では個と共同体の葛藤が主題となっており，海外でも評価が高いのはこの主題の普遍性による。国境を越えた現代人の実存状況をとらえ，絶望と可能性という両義的な世界を描くことで国内外の読者の関心を喚起している。本論文の各部の論述は一貫してこの立場から分析され，また，その分析と考察の結果もこの著者の立場を支持するものとなっており，全体としてまとまりのある論考となっている。

本論文が示した独創性は，二十一世紀における公房文学の国際性を視座にすえて，その文学の諸特徴を再評価しようとしたことである。公房の作品のみを読むのではなく，多様な文化・文学理論を応用するという方法により，公房文学のもつ普遍的な魅力をダイナミックに追究している。ポストモダン論，ポストコロニアル批評をふまえつつ，チャペック，キプリング，サイード，フーコーなどの思想あるいは文学との大胆な比較を試み，テクストの精緻な分析を行っている。公房文学の世界性を認めた上で，日本の文化的・歴史的コンテクストを背景に浮かび上がる人間存在の根源的な問題を探究し，その解答を求めようともしている。このような観点から分析された結果，公房文学の普遍的魅力があらためて明らかにされている。

本論文は，非漢字圏出身の著者が，現代人の実存状況を実験的手法により限界まで問い続け国際的にも著名な作家・安部公房のペシミズムと独自のユーモアに富んだ作品群に粘り強く取り組み，その世界的な価値をあらたに検討した努力の結晶である。この点は高く評価できるが，本論文にはいくつかの欠点がある。ま

ず，「実存の越境性」という主題には曖昧な点があり，主題設定のさらなる明確化が今後の課題として残る。さらに，十分とはいえない論理展開がないわけではない。しかし，このような限界は，著者の今後の研鑽に期待すべきものであり，安部公房文学の再評価として本論文の挙げた成果は学位論文として十分な水準に達しているものと判断される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。